マレイシアの派遣業務を終えて

峯 村 伸 哉

マレイシアという国

マレイシアは北緯2度から6度の熱帯に属する国で，その国土は2つの部分からなっています。すなわち図1に示すように，アジア大陸に属するマレー半島と，ボルネオ島の北側とです。日本と比べると，面積はほぼ同じですが，人口は2割弱です。おおよその人種構成はマレー人が6割，中国人が3割，インド人が1割となっています。中国人は主として錫（すず）の採掘のために，インド人はゴム園での仕事のためにそれぞれイギリスの植民地時代に移住してきました。

日本と同様に国土の7割は森林です。森林の内訳をみると8割は天然林であり，残りの2割はゴムノキと油ヤシ（オイルパーム）がメインの特用林産物生産林となっています。日本の人工林に相当するものとして，アカシアマンギウムを主要樹種とする造林地がありますが，その面積は全森林面積の1%以下です。アカシアマンギウムはその成長性のよいことから注目されてきましたが心腐れが生じやすいため，今はそのハイブリッドの植栽が検討されています（写真1）。

錫，木材，ゴムのような原材料が，かつては輸出の花形でした。しかし今は，家電製品や繊維品が主要輸出品目となり，ゴムやヤシ油も含めた木材関連製品が総輸出額に占める割合は2割以下となっています。木材製品については，丸太のままよりも合板や集成材などに加工した輸出が急増しており，中でもゴムノキ利用の家具の伸びが著しくなっています。ゴムノキは植栽後30年を経ると更新のために伐倒されます。この伐倒木はかつては木炭くらいの用途しか考えられず，その処理が問題でした。しかし，防腐，乾燥，集成加工などの進んだ技術を取り入れることにより，用材としての道が確立されました。

写真1　アカシアの品種改良
左　：アカシアマンギウム
中央：アカシア　ハイブリッド
右　：カマバアカシア

歴史的遺産としては，ヨーロッパ人が16世紀以降にアジアに進出したときの石の建築物がマラッカに見ら

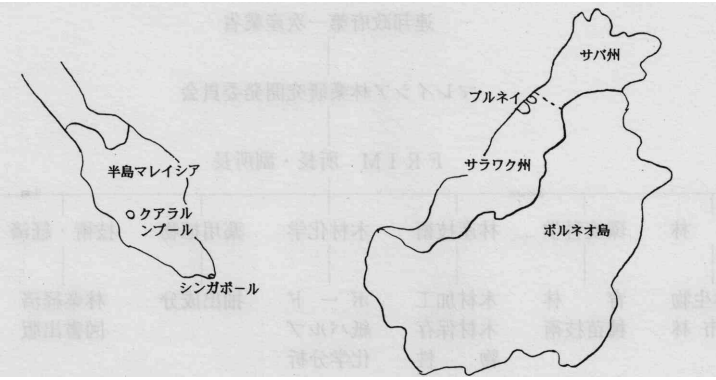

図1　マレイシアの国土

れる程度です。法隆寺のような古い木造建築物や，ジャワ島やタイで見られるような王朝跡の遺跡はありません。

日本との大きなかかわりとして，第二次大戦時に日本はイギリスの支配地であったマレイシアを3年間占領しました。真珠湾攻撃と同じ日に，マレー半島北端に上陸した日本軍は，南端のシンガポールまで破竹の勢いで進んでいきました。このときの主力移動手段であった自転車は，今も上陸地点のコタバルの戦争博物館に展示されています。

現在は日本の企業進出が著しく，マレイシア日本人商工会議所に登録されている会社だけでも500社あります。木材関係では，MDF（中比重繊維板），集成材，家具などに大きな日系の会社があります。

仕事の内容

筆者は1994年11月から1996年10月まで国際協力事業団(ＪＩＣＡ)に派遣され，長期専門家としてマレイシアに滞在しました。滞在の目的は，首都のクアラルンプール市（KL）にある国立の森林研究所（ＦＲＩＭ）で，「マレイシア林産研究計画」というＪＩＣＡプロジェクトのアフターケアを担当するためでした。

このプロジェクトは1985年から始められました。当初の5年間は，乾燥，保存，集成加工，木質パネル，抽出成分，パルプ化，製材の分野について，機材の供与，専門家の派遣，研修員の受け入れなどが精力的に行なわれました。その後2年間のフォローアップがあり，若干の中断のあと，今回のアフターケアとなりました。その内容は，前のプロジェクト実施後に追加が必要となった課題について対処するもので，材質，塗装，MDF，単板切削，構造用接着，炭化の6部門について，技術指導のための専門家派遣，研修員の受け入れ，機材の供与などを行なうものでした。筆者は長期専門家として，主に材質と塗装部門の指導と，業務調整を担当しました。なおMDFと単板切削の部門には，林産試験場から2名の短期専門家（遠藤企画課長と高谷合板科長）も派遣されています。

ＦＲＩＭに対するＪＩＣＡのこれまでの援助経過をみると，このプロジェクトの開始前に合板接着の長期専門家1人と木材化学の短期専門家1人が派遣されています。前者は林産試験場の北村維朗氏（現北海道林産技術普及協会専務理事）です。プロジェクト開始後の記録をみると，当初は化学分析には必須のガラス細工さえも十分できず，まずこれを教えることからスタートしたとあります。しかし現在はガスマス（ガスクロマトグラフ-質量分析計）やNMR（核磁気共鳴吸収分析装置）などの最新機器を十分に使いこなして，優れたデータを数多くだすまでに至っています。

マレイシアで現在行なわれている林業林産関係のＪＩＣＡプロジェクトには，サラワク州木材研究技術指導センターでの「効果的木材利用研究」と，ペラ州森林局での「複層林施行実証」の二つがあります。前者は木材を無駄なく有効に利用することで収益を増し，熱帯林の伐採量を極力少なくすることも目的にしています。後者はフタバガキ科の造林を効果的に行なうための手法として複層林施業を熱帯で試みるものです。

ＦＲＩＭの組織

ＦＲＩＭは林業林産の総合試験研究機関であり，図2のように9つの部から構成されています。林産関係の研究は，林産技術，木材化学，薬用植物の3部で行なわれています。

林産技術部には，集成材，製材，加工，合板，防火，

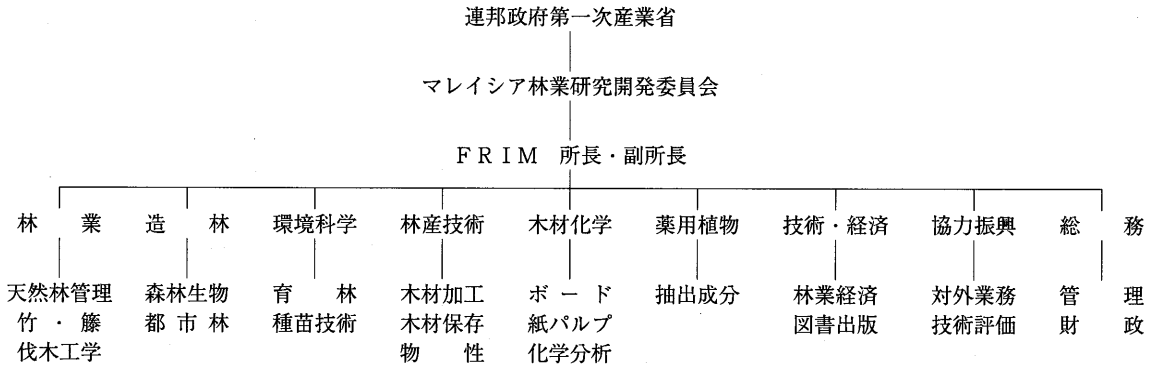

図2　マレイシア森林研究所（ＦＲＩＭ）の組織

防蟻，防腐，木材保存，材質，強度，構造，乾燥，塗装，竹・籐，機械補修などの部門があり，現場の作業者も含めて約150名がいます。木材化学部には，炭化，紙パルプ，セメントボード，パーティクルボード，土壌分析，防腐剤分析などの部門があり，約60名がいます。薬用植物部は木材化学部から分離したもので，天然物化学，生理活性，薬品などの部門があります。

ＦＲＩＭには博士号所有者が約40名おり，東南アジアにおける林業林産研究機関として突出しています。世界林業試験研究機関連合会の会長は一昨年までＦＲＩＭの所長でした。

ＦＲＩＭは熱帯のイスラム教国の研究機関なので，日本とは異なる点が沢山(たくさん)あります。二三の例をあげてみますと，ＫＬには強風をともなう雨がないので，構内の試験棟には壁がないか，あっても金網で囲う程度です。従って屋根の庇(ひさし)が短いところでは，スコールのときに雨が中まで入り込み，機械が錆(さび)るのが早くなります。

支場も含めた敷地は1500haもあり，構内には真っすぐに伸びた木がうっそうと繁っていて，イグアナや蛇も目にします。芝生は日本のものよりも丈が短く，葉幅が広くなっています。おじぎ草があちこちに雑草のように生えています。蚊が多く，屋外で仕事をすると，たちまち赤い斑点が体にできます。蚊といってもブヨのようであり，音をたてずに飛んできて血を吸い，すばやく逃げ去ります。構内にはモスクがあり，金曜日の昼休みは特別に長い時間が設けられていて，ここに集まってお祈りをします。イスラム教の信者以外は集まる必要がないので，中国人やインド人の職員は自宅でゆっくりくつろげる時間となります。

勤務時間は朝8時から夕方4時15分までで，土曜日も半日勤務です。したがって祝日が並んで二連休となる日は年に二三回しかありません。

果物は豊富

熱帯にはさまざまな種類の草や木があるので，その果実である果物の種類も豊富です。到着した翌日に買い物に行った店先で，日本では見かけることのないフットボール大のパパイアが40円で売られているのを見て，南国に来たことを実感しました。

パパイアは木の実というよりも草の実といったほうがよいようです（**写真2**）。トウモロコシくらいの背丈の幹に，先端部分から沢山の実をぶらさげます。実の形はだ円で果肉は厚く，食べるときはメロンのように上から下へ二つに割り，中の種を取除いて，スプーンで食べます。さらっとした甘みがあり，酸味はないので，誰にでも好まれます。タンパク質分解酵素のパパインを含むので，肉を食べるときには一緒に食べるとよいとされています。

マンゴスチンも誰もが好む果物です。常緑樹の堅い実で，熟すると表面が黒紫色になります。大きさはミカン程度です。表皮の下には赤褐色の果肉層があり，中心部には，白いマシュマロ状の厚い仮種皮に包まれた種が，ミカンの房のように並んでいます。赤褐色の層はタンニンのような渋みのある繊維質なのでとても食べれませんが，マシュマロ状の部分は甘くとろけるような感じがあり，非常に美(おい)味しいものです。食べ方は，実の中央部の周囲に刻み目を入れた後，手で上下に分割し，マシュマロ状の白いものを口の中に入れてしゃぶり，残った種を出します。

ドリアンは30mにも達するような高い常緑樹の実です。サッカーボールくらいの大きさがあり，実の表面はバラのとげを大きくしたような太くて厚くて硬い突起物で覆われています。熟すると高い木から自然に落ちてきます。シーズンになると**写真3**に示すようにドリアンの木の下でテントを張って落ちるのを待つ姿も目にします。その有様は世界的に有名なラットの漫画にも描かれています。

なたで割ると，クリーム状の粘稠(ねんちゅう)物で覆われた数個の種が，ミカンの房のように中心部に並んでいるのがみえます。この粘稠物が食用になりますが，甘みはあるものの独特の強い臭いがあります。この臭いをあえて形容すると，バターの腐敗臭です。個人の好みがあり，日本人の場合，熱烈なファンになるか二度と食べ

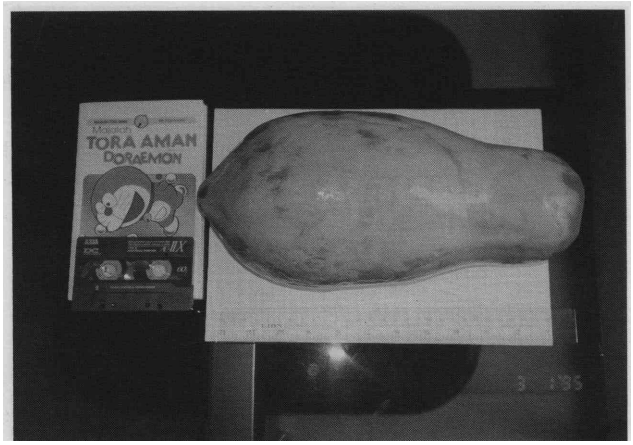

写真2　大きなパパイア

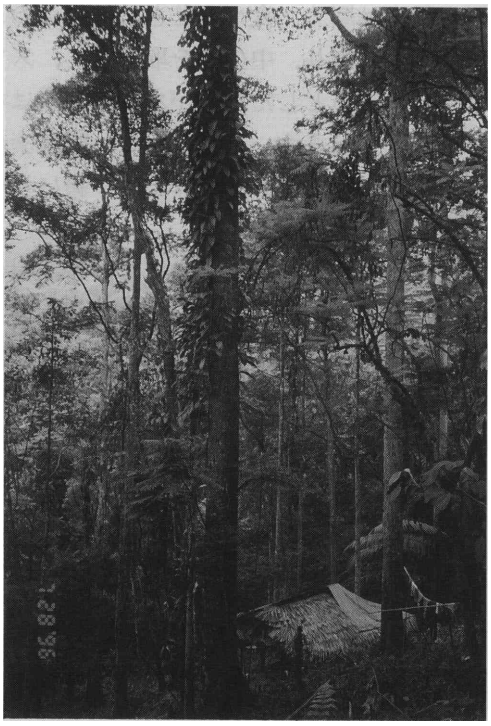

写真3　小屋の中でドリアンの落下を待つ

写真4　木の幹に直接ついている花実

写真5　吹き抜けのあるデパート

たくなくなるかの，いずれかです。地元の人に聞くとマレー人は例外なく好きだといいます。においが強いため，ホテルやアパート，乗り物など，集団生活の場所への持ち込みは多くの場合，禁止になっています。したがって売られている場所は道路際であり，ここで品定めをしてその場で食べるのが普通です。ただしタイで採れるドリアンは臭いが少ないため，デパートでも売られています。落下後10時間以内に食べるのが最高とされています。時間が経過するほど臭いが強くなるようです。

このほかにもバナナやマンゴを始め，ランプータン，ジャックフルーツ，スターフルーツなど，多くの果物が売られています。その味覚が日本人にあうかどうかは個人的なものですが，バナナ，マンゴスチン，パパイアは，誰にも好まれるものでしょう。

花や実のつき方には珍しいものがあり，**写真4**のように木の幹に直接つくものや木の根元に大きな実をぶら下げるものなどがあります。

デパートの話

ＫＬ市内にはショッピングモール形式のデパートが数か所ありますが，その中でも日系のものは大きなものです。日本からマレイシアには4社のデパートが進出しています。ショーをやる吹き抜けの大きなステージが一階中央にあり，その周囲を各階の廊下が取り巻いて上から見下ろせる形になっているのが特徴です（**写真5**）。ファッションショー，歌謡ショー，民族舞踊など，いろいろな催し物が週に一度は開かれます。自国のものばかりでなく，アメリカから来たマジックショーや香港のジャッキー・チェンのサイン会といったものもあります。

デパートの中には，ほかに，映画館，遊戯施設，診療所，美容室，旅行代理店などもテナントとして入っています。日系デパートの食料品売り場には必ず日本食品のコーナーがあり，大体のものはそろいます。価格は現地生産品以外は日本よりも高くなっています。

現地で調達される日本的なものとしては豆腐，スイカ，ミニトマト，刺し身，シイタケ，オオヒラタケ，などがあります。米は栽培されているもののタイ米であり，日本人好みの短い米は法律上，日本からは輸入できないので，アメリカから入ってきます。キノコは高地の涼しいところで栽培されています。オオヒラタケは何個も重ねてパックに入れて売られるので形がく

ずれています。

マレイシアは熱帯にあるためか，キノコが自然発生する機会が少なく，発生したとしてもすぐに虫が入ってしまいます。マレー人にはキノコを食べる習慣があまりありません。中国人は漢方薬になじみがあるせいか，キノコをよく食べます。中国本土のナメコの缶詰めが食料品店に並んでいたり，干しシイタケが薬局で売られていたりします。

マレイシアは赤道に位置するので，北半球ばかりでなく南半球からも生鮮食品が輸入されます。例えば，リンゴはアメリカや日本から入ってきますが，北半球での季節が過ぎると，今度はニュージーランドから入ってきます。

売り場には女性店員がいますが，この態度が極めてよくありません。客がこないときは物を食べていたり，商品の上に肘をついて通る客を眺めていたり，客がいても友達と雑談を続けたりといった具合で，日本のように笑顔で応対することはありません。

現金よりも小切手が流通

食事や日用品のような少額の買い物は現金でよいのですが，一万円程度を超える品物の購入は大体が小切手での決済です。

現地での仕事の開始は，まず銀行に行って公金用と個人用の二つの当座預金口座を開くことでした。ＫＬにある日本の銀行はＴ銀行のみであり，ＪＩＣＡからのお金はすべてここに送られます。開設には約4万円の頭金が必要です。開設すると25枚つづりの小切手帳をくれます。買い物をしたときは，その金額を小切手の所定の欄に，数字と完全な英語の2種類で書きます。例えば1,234.56であれば，英語の表示は，one thousand two hundred thirtyfour and cents fiftysixです。そして相手の名前と日付を書き，相手の銀行口座にのみ入金可能であるという意味の斜線二本を左上に書いて，サインをして相手に渡します。サインは他人に真似されにくい書体でなければなりません。日本人は漢字を使うのが普通のようです。筆者は，漢字4文字の自分の名前としました。

小切手はどんなに高額な買物でも数字を書くだけで可能となるので大変便利です。しかし自分の口座の残高以上の金額を書いたとき，つまり不渡りを出した場合は，一回目なら入金すれば許されますが，二回目の場合は口座が閉鎖され，その後は永久にどこの銀行でも口座の開設が認められない仕組みになっています。

日本の新聞はその日に読める

東南アジアの大きな都市であれば，日本の新聞はその日に読めます。東京からの電送で版が作られます。広告欄の一部は現地での独自編集です。朝日と日経はシンガポールで印刷されており，読売はバンコクで印刷されています。航空便で日系の書店に配送され，定期購読者には個別配達もされます。夕刊はありません。料金は一か月約一万円です。バンコクでは読売が現地の一般の書店でも地元の新聞と一緒に売られており，日本人滞在者の多さがわかります。

東南アジアの主要都市では日本語の現地新聞も発行されています。マレイシアの場合はＫＬに，週刊と隔週刊の二つの新聞があります。現地の政治経済の動きや催し物が日本語でわかるので重宝です。スーパーや日系書店に置いてあり，無料です。広告収入のみで運営されています。マレイシアでは中国語の日刊紙も発行されています。漢字ばかりですが，眺めていると大体の意味がわかるものが結構あります。地元で発行される中国語や英語，マレー語の日刊紙は，頁数が多く，カラーも豊富です。

日本の書籍は日系デパート内の書店で入手できます。週刊誌は東京から航空便でくるので北海道とほぼ同じころに読めます。学習参考書や文庫本，ベストセラーなども沢山おいてあります。マレイシアはイスラム教の国であり，検閲が厳しい国です。日本の週刊誌のグラビア写真には，黒く塗りつぶされていたり切り取られていたりする部分が多くあります。修正やカットの有無にかかわらず，日本の書籍の売価は，定価の約5割増しです。

交通はバスが中心

公共の交通機関はバスが主流です。日本のような大型バスのほかに，近距離用にミニバスと呼ばれる20人乗りくらいの小型があります(**写真6**)。長距離バスは冷房になっていますが，近距離用のバスは冷房のないのが多く，窓やドアを開け放して走ります。停留所は決まっていますが，時刻表の掲示はありません。おおよその通過時刻は決まっているものの，渋滞で一定しないためなのでしょう。乗るときは停留所で待ちますが，手をあげて合図しない限り，止まってはくれません。

ミニバスは小回りがきくので，車のあふれる町中では最適です。ミニバスの運転手は歩合制になっているので，できるだけ多くの客を乗せようとします。同じ路線に何台も走っているため，少しでも早く走って回転率を高めようとします。したがって渋滞する車の列を強引にかき分けて進みます。沢山の客を乗せているんだから避けるのが当たり前だと言わんばかりに進んで行きます。ミニバスのメーカーはベンツであるものの，かなり昔のものであり，接触した跡があちこちについています。このような車にぶつけられてはかなわないので，一般の車はしぶしぶ道をゆずる羽目になります。料金は乗車距離に関係なく一律25円です。始発から終点まで乗ると15キロはあるので，乗りがいがあります。

写真6　ミニバス

写真7　マレー鉄道の電車

バスの運賃はミニバスに限らず全体に安くなっています。ＫＬからシンガポールまでは約500キロもありますが，高速道路を通って冷房つきのバスで千円で行けます。

バスのほかに鉄道もあります。マレー半島を横断しており，大部分はディーゼル区間です。しかしＫＬを中心とした半径約100㎞は，二年前に電化されています。この電車を利用して近郊から市内中心部へ乗り入れる通勤用マイカーを規制することが考えられており，スマートな車体の電車も走っています(写真7)。しかし電車の本数が少ないことと，停車駅からのバスの便が整備されていないことのために，利用は今いちです。日本ならば自転車で駅まで行って電車に乗り換えることが考えられるのでしょうが，この国は毎日最高気温が35度にもなるので，とても暑くて自転車をこぐなどという気にはなれません。したがって自転車はほとんど見かけません。

タクシーもあり，料金は日本の5分の1くらいです。しかし，ドアは手動式なので開閉は自分でやること，乗車拒否は当たり前なのであらかじめ行く先を告げ，さらには料金も確認してから乗ること，座席のカバーが破れていたり．ドアが軋(きし)んでいたりというような整備不良はあたりまえであること，などを承知の上で乗らなければなりません。悪質の運転手がいて，ときどき旅行者がぼられることもあるのですが，基本の料金が安いだけに，乗った本人は高すぎるとは感じません。

昨年末にはモノレールが市内の中心部に開通しました。新しい国際空港やこれに伴う新たな鉄道網も建設中です。数年後には近代的な交通システムが完成しているはずです。

治安はやや不安

マレイシアに着いてまず目につくのは，普通の住宅の窓には必ず鉄格子がはまっており，塀の上には鉄線が張り巡らされていることです。したがって政府や企業から派遣されている日本人は，万一のことを考えてほとんどがコンドミニアムに住みます。この建物は，プール，テニスコート，売店などが完備した高級マンションで，複数のガードマンが24時間常駐し，出入りに目を光らせています。マレー人やインド人はもとも

と眉毛が濃く目付きが鋭い人が多いので，もしやと思いつつ着任当初はいつも財布に気をつけて歩きました。しかしスリやひったくりにあうこともなく，周囲の人からもこのような話は聞かなかったので，治安はかなりよい国と次第に思うようになりました。

ところが滞在半ばに，KL郊外のコンドミニアムで現地企業駐在員の日本人夫人が昼間殺害されるという事件が起こりました。また別なコンドミニアムの駐車場では日本人男性が銃で撃たれて金を奪われるという事件も起こりました。

マレイシアの所得水準は東南アジアではシンガポールについで高く，インドネシアやミャンマーから出稼ぎにくるほどです。しかし，エンパイアビルディングやシアーズタワーを抜く世界一のオフィスビルが完成しつつある一方で，人通りの多いところにはいまだに物乞(ものご)いがいるのが現実です。警官に速度違反を指摘されても，その場で若干の現金を渡すと済んでしまうこともまだ可能な国なのです。治安はまだ日本よりも悪いのではないかと思われました。家の窓から鉄格子が取れるときが，この国が発展途上国から先進国に仲間入りするときであろうと感じました。

医療事情

派遣前に入念な健康診断を受けたとは言え，現地では何が起こるかわからず，病気になった場合の不安はいつも頭にありました。幸い滞在中は，風邪を引いたことと歯の詰め物がとれたことくらいで，大きな病気はしませんでした。

KLには日本の大学の医学部を卒業した中国人の開業医がおり，また日本人看護婦の勤務する病院もあります。しかし，主要な医療機器は輸入であり，現地の日本人が高度な医療技術を受ける場合は帰国するようです。人通りの多い商店街を歩いていると，棟続きの店の一つが24時間営業の診療所であるという光景によくあいます。医師は3交替制らしいものの，そんなに病気になる人が多いのかと思ってしまいます。街の食堂の衛生状態は決してよいものではありませんが，コレラや赤痢のような集団食中毒発生の話は聞きません。夜通し開いている理由をマレー人に聞いてみると，医師に限り公務員であっても勤務時間外に働くことが認められているため，このような形の副業が存在するようです。

マレイシアの英語

マレイシアの公用語はマレー語です。しかし，長い間英国の植民地であったため，社会制度や行政組織が英国に準拠しており，また学者や官僚の上層部には英国で高等教育を受けた人が多くいます。このため英語はほとんどの場所で通用し，小学校から英語の授業が行われています。しかしジャパニーズイングリッシュという言葉があるように，マレイシア特有の英語や，アメリカ英語では使わない言い回しもあります。以下，二三の例を書きます。

○can-can（キャンーキャン）。

「～できますか」とか「～してもよいですか」とたずねたとき，OKなら「イエス　ユウキャン」となるべきところ，「キャン－キャン」という返事がきます。日本語の「できる。できる。」にそのまま当てはまり，わかりやすいものです。

○語尾を上げると疑問文

相手に何かを尋ねるときや許可を得たいとき，正式な英語であれば，動詞や助動詞を文頭にもってきたり，疑問詞を使ったりしなければなりません。しかし平叙文の語尾をあげても，疑問文として立派に通用します。マレー語の疑問文の作り方がこのようになっていることが影響しているのかもしれません。

○「not in」（ノットイン）と「on leave」（オンリーフ）

「誰それさんは，いますか」と尋ねたとき，その人が不在であれば，「ノットイン」という答えが返ってきます。日本語の「いない」に相当します。不在の理由が休暇であれば，「オンリーフ」がさらに加わります。

○「オッケラ」

都合がよいとか，それで丁度ちょうどよいと言う場合に，OKのあとにラをつけて「オッケラ」といいます。

この他に，色を意味するカラーはcolourであり，セルフサービスの食堂はカフェテリアではなくてカンティーネです。

使える英語とは

日本の中学校や高校の英語の授業では，完全な文章で話したり書いたりすることが要求されます。またガイドブックの「役立つ英会話」でも，主語，動詞，目的語が，きちんと並んだ文章が載っています。日本で

は普段の日常生活で英語を使う機会がないだけに，実際の場面でもこのように話さなければならないと思いがちです。

しかし普段の日常生活で，例えば，「あなたはもう夕ご飯を食べましたか」というような尋ね方をするでしょうか。「食べた？」とか「すんだ？」とか「晩ご飯は？」と言うでしょう。同じことが英語を話す場合にも言えます。キーポイントとなる単語を言うだけで，意志疎通は十分に可能なのです。このような経験は何度もしました。思うにこれは英語に限らずどの外国語でも言えることでしょう。

さて話すことはこれでよいとして，相手の言ったことが聞きとれなくては先に進みません。このヒアリングに熟達するにはポイントとなる言葉を聞き取ることです。それにはいろいろな英文に接し，抑揚や発音に親しむことでしょう。ある有名な同時通訳者は，中学2年生の英語の教科書を，そのモデルテープの発音を聞いた後，毎日お経のように何回も声を出して読むことを勧めています。2年生の教科書には日常使う文の基本パターンがほとんど入っていること，声を出すことで赤ん坊が母親から聞かされるのに近い状況が作りだせること，などがこの理由です。

ＪＡＩＣで仕事をするには

官庁や会社に籍をおいたまま，あるいは退職後に，外国でＪＩＣＡの仕事をする方法について触れておきます。

ＪＩＣＡは外務省の外郭団体であり，世界の発展途上国に対してさまざまな分野で援助を行なっています。相手国への派遣は，すべて相手側からの要請課題の解決のために行なわれます。その課題の適任者が日本国内で選任されて派遣されます。

派遣時の身分は，専門家，青年海外協力隊員，シニア海外協力隊員の三つに分けられます。専門家には，派遣期間によって一年未満の短期と一年以上の長期があります。いずれの場合でも，外国勤務に対する在勤地手当が支給されます。支給額は勤務地によって異なり，長期専門家の場合は，その課題に対する経験年数によっても異なります。

専門家として行く場合は，他の二つに比べて手当の額は多いものの，仕事の要求内容がきびしくなります。青年海外協力隊員とシニア海外協力隊員はいずれもボランティア的な側面をもちますが，両者の違いは年齢です。派遣期間は長期にわたることが多くなります。支給額は，いずれの場合でも現地での普通の生活には十分なものです。また国内に籍を置く官庁あるいは会社がある場合は，それまでもらっていた給料にほぼ近い額が，在籍先に支払われます。籍のない場合には，一定の額が国内の本人口座に積み立てられます。

おわりに

多くの方々のご支援とご配慮により2年間の派遣業務を終えることができました。熱帯といってもそこには沢山の人が生活しており，慣れてしまえば快適です。花フェスティバルのような生活を楽しむ行事も多くあります(写真8)。異文化に接することは視野を広くしてくれます。このような仕事に参加することは意義あることと考えます。なお誌面の関係上，本文で触れることができなかったことが以下に記載されています。

1）峯村伸哉：林，1997年6月号，p.1-6，同7月号，p.45-50
2）峯村伸哉：ＡＰＡＳＴ，1996年10月号，p.17-21

写真8　花フェスティバル

（林産試験場　利用部長）